

松ノ井覚治の建築ドローイング

美術工芸資料館には建築家・村野藤吾(1891-1984)の膨大な設計図面が保管されている。多くは繊細な手描き図面だが、資料として使われたであろう複製図面も一部含まれる。そのなかでひととき異彩を放つのが、ニューヨークのウォール街に建つバンク・オブ・マンハッタン・トラスト・ビル(1930年5月にクライスラー・ビルに抜かれるまでの2ヶ月間余、高さ世界一のビルだった)の大きな立面の青図である。アメリカ流の実用主義的な建築を地で行く渡辺節の下で鍛えられた村野は、独立後もアメリカ建築界の動向に目を向けていた。とはいえ、これは村野が資料として同時代的に入手したものではない。「村野藤吾様へ 1930年7月30日、この建築を共に訪れた記念に。 松ノ井覚治 1976年10月21日」(原文は英語) — 青図に書き加えられたこの一文は、これが村野にとって特別な意味を持つことを伝える。何を隠そう、戦前のニューヨ



〈州会食堂 (A State Dining Room)〉1921年、KM-15-1

クで村野を連れて摩天楼を訪れ、晩年にその青図を送った松ノ井覚治こそ、ここに紹介する美しい建築ドローイングを描いた人物なのである。

松ノ井覚治(1896-1982)は、戦前のニューヨークで活躍した特異な経歴を持つ建築家である。山形県に生まれた松ノ井は、米沢工業学校を経て早稲田大学で建築を学ぶ。村野とは大学の同級で、共に研鑽を積んだ。ふたりは1918年に早稲田を卒業、村野は大阪に移り渡辺節の事務所に勤めるが、松ノ井は海を越えてニューヨークへ渡った。松ノ井は現地の建築事務所に勤めながら、コロンビア大学のエクステンション・コースで建築の意匠設計を学び、やがて摩天楼の建設ラッシュに湧くニューヨークで建築家として活躍する。ニューヨークでの生活は13年間に及んだが、不況の嵐が吹き荒れ、戦時色が見え始めた1932年に帰国

の途につく。日本に戻った後はヴォーリズ建築事務所の東京出張所所長を務め、戦後は自身の建築事務所を立ち上げて活躍した。ヴォーリズが東京に残した数江邸(旧・亀井邸/国登録有形文化財)や東洋英和女学院などのスパニッシュの名作は、松ノ井が担当した作品である。

松ノ井がニューヨークで最も充実した時期を過ごしたのは1923年から籍を置いたモレル・スミス建築事務所であった。松ノ井はここで頭角を表し、1928年には事務所が建築顧問を務めるバンク・オブ・マンハッタン銀行の本店建替に際して、先輩所員を差し置いて設計主任に抜擢される。バンク・オブ・マンハッタン・トラスト・ビルの主階に位置するこの銀行を、松ノ井はアメリカン・コロニアル様式

を基調として、ウォール街に構える銀行本店にふさわしい気品に満ちた壮麗な空間で作り上げた。1930年7月末、村野は独立直後の欧米外遊でニューヨークに立ち寄り、

松ノ井とこのビルを訪ねた。銀行の玄関前で撮影したふたりの写真が残るが、松ノ井は何とも嬉しそうな笑顔である。旧知の友人を、自身の集大成に案内できた喜びでいっぱいだったのだろう。

さて、松ノ井がこの大きな仕事を任されるに至るまでに、ニューヨークに渡って9年、事務所に入って5年の歳月が流れている。この間に松ノ井は建築家としての経験を積み重ねたわけだが、とりわけ建築事務所に勤めながら大学に通い、大手事務所への勤務を勝ち取るまでの渡米直後の数年間に、相当の修練があったことは想像に難くない。ここに紹介する美しく着彩された建築ドローイングは、まさにこの頃、ボザール・インスティテュート・オブ・デザイン(BAID)の公開課題に応募するために描かれたものである。BAIDとは、パリのエコール・デ・ボザールに倣った建築教育によって、

戦前のアメリカ建築界に流行したアメリカン・ボザールの本拠ともいえる団体である。BAIDが出題する課題は広く全米に公開され、審査結果は出題内容と共に建築雑誌『American Architect』を通じて全米に向けて紹介された。いわばアメリカにおける歴史主義建築の登竜門である。

本頁に掲載した〈小都市のためのホテル〉の課題を例にあげよう。1923年の上級クラス第2課題として出されたこの課題は、人口約6万人の小都市に、単なる商業目的ではなく都市経済や社会活動の地域拠点となるようなホテルを設計せよ、という内容である。敷地条件や所要設備が事細かに設定されたが、具体的な場所や階数などは指定され

ておらず、周辺環境の想定を含めて応募者に委ねられたようだ。諸条件を満たしながら、独自の構想と表現が求められたわけである。これに対する松ノ井の提案は、



〈小都市のためのホテル (A Hotel for a Small Town)〉1923年、KM-9-1

大きくならぬ稜線を背景に、スパニッシュ・スタイルの邸宅風にまとめた中層の計画で、細部の装飾まで精緻に描き込まれたドローイングからは松ノ井の技量の高さが窺える。松ノ井はこの課題で2等メダルを受ける。内装設計が課題となった左頁の作品も入賞を果たしたものであるが、松ノ井は参加が確認できる12課題(1919-23年度のもの。10課題分を美術工芸資料館が所蔵)のうち10課題で入賞を果たしている。すなわち、これらの建築ドローイングは、渡米間もない松ノ井の建築設計や図面表現の優れた技量を示すとともに、当時のアメリカの建築教育の水準を今に伝える貴重な建築資料でもあるのだ。

松ノ井は、実務の傍らで公開課題の入賞を重ね、歴史主義建築全盛のアメリカで認められる実力を養った。後に「日本にはスパニッシュで自分の右に出る者はいない」と

自負するまでになる松ノ井の技量は、下積み時代に描かれたこの一連の建築ドローイングの上に築き上げられたものだといえる。渡辺節事務所に入った村野が海洋気象台の指名コンペを初めて任せられ、当選を果たすのが1920年。ふたりの若き建築家は、海の東西は違えども、自らの力で同じ道を切り開いていった。だからこそ、互いの節目に実現したニューヨークでの再会は、晩年まで輝かしい記憶として生き続けたのだろう。

今回紹介したドローイングを含む松ノ井の資料は、2014年1月にご遺族から美術工芸資料館に寄贈いただいたものである。松ノ井と親交のあった村野の資料を同館が整理・保管・紹介してきたことが縁を結んだ。受け入れた

資料を整理している時、ここにバンク・オブ・マンハッタン・トラスト・ビルの大きな青図が含まれているのを目にして手が止まった。冒頭に紹介した、村野資料に含

まれる青図を思い出したからだ。別々の立面を示す2枚の青図は、松ノ井が大切にニューヨークから持ち帰ったもので、輝かしい青春の日々に思いを馳せるなかで旧友を連れて歩いた一日を思い出し、1枚を村野に贈ったのだろう。時を経て、ふたつの図面は再び出会うことになった。こうして図面本来の役割を越えて浮かび上がる建築家たちの物語に触れる時、私達は建築資料の意義に改めて気付かされるのである。

大学院工芸科学研究科 建築学部門 三宅 拓也 助教